〔隨意錄四〕江都氣候、三冬雖不温、然歲中雪希、而至春或屢雪、年年多爾、然不經日而消釋、今茲文化六年十月廿五日初雲、寒亦甚、十一月十三日十四日、兩日雨、夜雪平地可周尺二三尺、爾後日日寒太甚、經三旬而雪不消、十二月十三日復雪、至十五日不歇、不掃雪處、積五六尺、廿六日暮至廿七日又復雪、踰年乃正月二日夕至三日朝、又復雪、八日又終夜雪、十二日又雪、而去冬十月初旬以來、至春不雨、故十一月之大雪不消、而乃又驟尙之、積素殆埋檐、予東都之住、五十年來、未曾之有也、且聞古來大雪國奥羽及信越、則去冬雪淺於例年、平地不盈尺、二總二毛、亦猶少於江都、筍荷山亦不深於平歲、此去冬以來大雪、不出乎武州界也、地氣之變化、實不可測也、

〔北越雪譜初編上〕雪の堆量　余（鈴木牧之）が隣宿六日町の俳友天吉老人の話に、妻有庄にあそびし頃聞しに、千隈川の邊の雅人、初雪より（天保五年）十二月廿五日までの間、雪の下る毎に用意したる所の雪を、尺をもつて量りしに、雪の高さ十八丈ありしといへりとぞ、此話雪國の人すら信じがたくおもへども、つら〳〵思量に、十月の初雪より十二月廿五日まで、およその日數八十日の間に、五尺づゝの雪ならば、廿四丈にいたるべし、隨て下ば隨て掃ふ處は、積て見る事なし、又地にあれば減もする也、かれをもつて是をおもへば、我國（越後）の深山幽谷、雪の深事はかりしるべからず、天保五年は我國近年の大雪なりしゆゑ、右の話誣ふべからず、

〔武江年表九〕嘉永六年正月十六日、朝より大雪尺に滿つ、翌十七日より十八日まで三日の間、大雪降つもる、（十八日申刻に止む、但し十七日より夜へかけて降りたり、七旬の老翁もかいることば見ずと、）

〔日本書紀二十推古二〕三十四年六月、雪也、

〔三代實錄二十清和七〕貞觀十七年六月四日乙卯、太政官曹司廳南門、雪花散落、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年七月廿六日辛卯、朝雨雪如霜、

〔日本紀略十二三條〕長和二年三月廿四日乙卯、東西山雪降、京中大寒、去十四日立夏也、人以爲怪、

不時降雪